

生存科学研究ニュース

Vol. 39, No.4

2025.1 発行

発行 公益財団法人 生存科学研究所

〒104-0061 東京都中央区銀座 4-5-1

tel: 03-3563-3518 fax: 03-3567-3608 email: office@seizon.or.jp http://seizon.umin.jp

生存科学研究所は設立 40 年

副理事長 丸井 英二



2025 年(令和 7 年)明けましておめでとうございます。

年が明けて暦は辰年から巳年へと変わりましたが、今年度は生存科学研究所が設立されてから 40 年という節目の年度です。1984 年からの設立 40 年を記念して生存科学研究所

では二つの記念事業を企画して進めています。

ひとつは、2025 年 1 月 11 日(土)午後開催される創立 40 周年記念シンポジウム『生存科学への期待』です。これは今までの生存科学研究所を振り返るとともに、これからの 10 年、20 年を切り拓いていこうという意欲をもって企画されたシンポジウムです。本財団の評議員でもある村上陽一郎先生、工学の長井 寿先生、社会精神医学の栗田 圭一先生、人類生態学そして国際保健の門司 和彦先生の 4 人の先生方に講演と討議をお願いしています。

世界がどのように変わっているかを科学的に解明するだけでなく、むしろ「世界はどうあるべきか、人びとはどうあるべきか」を構想することが生存科学の任務の一つでもあります。本シンポジウムでは、生存科学の大きな柱の一つである「バイオエシックス」が一つの軸になるとおもいます。

会員をはじめとしてより多くの皆さまに参加していただくことが可能となるように、今回もまたオンライン配信といたしました。本ニュースレターがお手元に届くころには終了しているかと思いますが、当日ご都合の合わない会員には改めてオンデマンドでご覧いただくことも可能です。ぜひご覧ください。

もう一つの企画は、1984 年 3 月に設立された生存

科学研究所の今までの歴史をたどり、生存科学の過去、現在、そして将来を捉えなおすための 40 年間のまとめの作業です。一年後あたりには『生存科学研究所 40 年史(仮)』というような形で出来上がることを目指しております。とはいえ、現在その作業は緒についたところですが、過去の資料の山と格闘しながら、時代の変遷と生存研の事業、研究活動、社会活動をまとめて、これからの生存研のあり方の出発点とすることを目指しています。

現在、この歴史の記録をまとめ、残す作業はわずかな人数で行われています。40 年たって、過去の状況を直接に知る過去の会員の多くがすでにいらっしゃらない現状です。この活動に興味と関心をもっていただき、お手伝いいただける会員の方がいらっしゃいましたら、ぜひ手を挙げて一緒に生存研の歴史を掘り起こし、将来に向けてまとめる作業にご参画いただけますようお願いいたします。事務局に一声おかけください。仲間を募っております。

また、今までの活動にかかわる写真など織り込むことで、より分かりやすい魅力のある 40 年史となります。過去の研究所にかかわる各種の資料あるいは写真などお持ちでいらっしゃいましたら、ぜひご提供いただければ活用させていただきたいと考えております。ご協力をいただければ幸いです。

武見太郎先生の没後に設立されて以来の 40 年、生存研のさまざまな活動により生存科学は継承され現在に至りました。そして、これからの 10 年、20 年は地球の生態の変化とともに人びとの生活と生命は大きく変わります。生存科学とその考え方は今まで以上に重要なものとなるでしょう。

新たな良い一年となりますこと、そしてみなさまのご健勝とご活躍を祈念して、年始のごあいさつとさせていただきます。

(人間総合科学大学人間科学部教授)

第12回生存科学研究所共催・

市民公開講座開催報告

本田 美和子

生存科学研究所のご支援を受けて毎年開催している、マルチモーダル・ケア技法：ユマニチュードに関する市民公開講座は今年で12回目を迎えることができました。多くの方々に人生のどの段階においても、自律と自由が実現する生活の場で誰もが暮らせるための手段としてユマニチュードを活用していただけるようお伝えすることが継続できているのは、故青木清先生をはじめとする、生存科学研究所のみなさまのお力添えのおかげです。心より御礼を申し上げます。

12回目の市民公開講座は、2024年9月28-29日に福岡市で開催されました第6回日本ユマニチュード学会・福岡総会と合同で開かれました。今回の日本ユマニチュード学会総会は、2017年からユマニチュードを市の政策として導入し、2024年4月には市役所の福祉局の中に「ユマニチュード推進部」を設置して市民・学校・救急隊など、ケアの専門職にとどまらず、多くの方々にユマニチュードを活用していただけるようさまざまなプロジェクトを展開している福岡市の高島宗一郎市長を大会長に迎え、「自治体とユマニチュード～社会基盤としての実践」をテーマに開催されました。

福岡市が取り組む、誰もが心身ともに健康で自分らしく活躍できる社会をめざすプロジェクト「福岡100」において、ユマニチュードの普及促進を核とした「認知症フレンドリーシティ・プロジェクト」を推進する高島市長による大会長講演、ユマニチュードを学んだ「ユマニチュード地域リーダー」が公民館や小中学校で市民・児童を対象にユマニチュードを紹介するプログラムの公開、厚生労働省健康生活衛生局の課長やユマニチュード地域リーダーによる「地域におけるユマニチュードの効果」についてのシンポジウムなど、さまざまなプログラムが展開される中、320人を超える参加者が集ったのが、ユマニチュード考案者のイヴ・ジネスト先生による基調講演で始まっ

た市民公開講座でした。

毎年新たな視点からケアについて語ってくださるジネスト先生の今回の講演テーマは「人間にとっての空間と時間と人生」でした。人が人生を歩むにあたって、空間が意味すること、空間がもたらす効果とは何か、について参加者と共に考えるこの講演で、ジネスト先生は次のようにお話しになりました。

人の受精卵が子宮に着床したときには、受精卵は相対的に無限の広大な空間である子宮の中で孤独な状態にある。胎児がすくすくと育つと、無限だった子宮の空間は身動きが取れないほど小さなものとなり、そして人間が誕生する。人が人間の世界に迎え入れられるためには、単に母親が赤ちゃんを分娩するだけでは十分ではなく、その後、周囲の人間から「あなたは人間ですよ」というさまざまなメッセージを浴びるように受けることによって初めて、社会性を備えた人間として誕生する。つまり、分娩によって生じる誕生を「第1の誕生」と呼ぶことにすれば、「あなたは人間ですよ」と周囲からのメッセージによって社会性を備えた人間としての誕生は「第2の誕生」である。ユマニチュードの4つの柱「見る・話す・触れる・立つ」は「あなたが人間だ、ということをおはわかっていますよ」「あなたは私にとって大切な存在です」というメッセージを相手に届けるための手段であり、私たちは人生を通じて自分にとって大切な人に対しては、無意識にこのメッセージを送り続けている。

さらに、人間は成長するに従って、自分の活動範囲を広げていく。家族の中で過ごした子供はまずは学校へ、それから家を出て大学で学んだり仕事をするようになり、その活動は家から街、そして外国、時には宇宙にまで活動範囲は無限に広がっていく。人生を通じて豊かな経験

を積みながら、人は次第に歳を重ねる。

歳を重ねると、体の変化を誰もが自覚するようになる。地平線まで歩くことができた脚力も、次第に家から出ることが難しくなってくる。寝室から食堂に移動することがやっとなり、椅子に座ったままで過ごすことが日常になる。無限だった生活空間はどんどん小さくなり、この小さくなった空間で、その人は誰かから「ケアを受ける存在」となり、「ケアをする人」と時間と空間を分かち合う。ケアはケアをする人からケアを受ける人への一方向のものではなく、両者は互いに「ケアを分かち合う」存在となる。つまり、両者はCare Sharer (ケア・シェアラー)なのである。両者がケアを分かち合う時に必要な手段がユマニチュードの4つの柱である。

そしてある日、人は死を迎える。小さくなった生活空間に閉じ込められていた肉体は、解放され、肉体は地球を構成する原子となって再び無限の世界に広がっていく。このように、人間の人生は自己が存在する空間の膨張と収縮との繰り返しを経験しながら進んでいく。たとえ相対的な空間が小さくなったとしても、それが自身の存在を矮小化することにはならず、私たちは常に広大な空間の中に存在していることを自覚し、自律した暮らしを送ることは可能である。それを実現するためにケア・シェアラーは力を貸すことができる素晴らしい相棒となる。



イヴ・ジネスト先生による基調講演

人間にとっての空間とは、単に物理的な意味をもつだけではなく、相対的であり、自己のありようが反映される概念的なものであること、そしてその空間を分かち合うためにケアが存在することを、情熱的にお話しました。

(国立病院機構東京医療センター)

生存の理法と現代社会の課題に関する実践的研究
—人的環境に焦点を当てて—

研究責任者 江口 晶子

世界で生じている新たな社会的課題は、「生存の理法」に関係する問題が多くなっている。本研究会では、その動向を、公衆衛生学、国際保健学、看護学、生命倫理学、障害福祉学、法学などの視点から学際的共同により探るとともに、課題解決に関わる人的環境について検討することをめざしている。今年度は、「生存の理法」に関わる実践的課題として、高齢者、特に認知症の人の生存の現状と課題を取り上げることとし、2024年8月23日(木)13:30~16:00、中央大学市ヶ谷田町キャンパスにおいて、東京家政学院大学名誉教授(社会福祉学)の西口守氏を講師に、タイ国コンケン大学看護学部、ラチャパット大学看護学部から14名を迎え、本研究会メンバー5名との合同研究会(対面及びZoom)を開催した。

西口氏からは、認知症を発症した妻の母親との同居の経験からの学びとして『認知症も悪くない＝物語を変えて「新しい」人生を歩む』をテーマに話をいただいた。社会的に認知症の怖さや悲惨さだけが繰り返し伝えられ、認知症だけにはなりたくないとの気持ちを煽るような報道も少なくない。しかし、認知症にならない努力はすべきだが、そのようなことをしたとしても「なるときはなる」と考えると、その「病」が存在する本質的な意味や意義、向き合い方を考えた方が健康的ではないのかとの問いと共に、認知症の人の力(強さ、強み)として次の3つが提示された。まず、認知症の人には、受け入れがたい事実を受け入れられるよ

うに、自分が納得できる「物語」につくり変える力がある。次に、介護が必要な人は、介護を受けることに満足するのではなく、人の役に立ちたいという気持ちがいつでもあることである。3つめに、(街並み失認や道順障害が見られなければ)自らの行動範囲を自ら無理のない範囲に修正し行動しており、経験に基づく勘があり、地域や家族の支援力があれば、家から出て家に帰れる力があることである。問題は「閉じ込めること」にあるのではないかとの指摘もなされた。そして、人に頼ることをよしとしない生き方をしてきた母親について、自らの弱さを認め、その弱さから始まる新しい「物語」をつくり、新たな自立、誰かと共に生きていくという意味での自立を探しあてることができたのは認知症という「病」を得たからこそと考えると「認知症も悪くない」と思うことができるのではないかとの考えが述べられた。

次に、タイの地域保健システム研究開発センター／コンケン大学看護学部のカニタ・ヌンタボット博士からは、「Community care for people with Dementia: Thailand Context」のテーマで報告をいただいた。タイの高齢化率は17.5%、平均寿命は男性71.8歳、女性79.0歳であり(2022年)、認知症の死亡率(人口10万対)は32.8、死因の第6位となっている(2020年)。カニタ博士らの調査によると、認知症は60歳以上人口の2～10%にみられ、約100万人がアルツハイマー病および血管性認知症の患者と推計されている。タイの医療提供はイギリス方式のレファラル制度で、7,255のタンボン(sub-district)に整備されているヘルス・プロモーション・ホスピタル(11,045施設)がゲートキーパーとなり、必要な医療機関に紹介するシステムである。2024年の医療制度改正では、遠隔医療サービスや在宅医療の拡充が示されており、認知症の医療についても、薬剤師や看護師による軽症者への患者指導や投薬といった外来対応とも合わせて、コミュニティ主体の医療サービスの提供が中心となっている。また、タイでは認知症に特化した形ではないが、ロングターム・ケア(LTC)と障害者ケアの枠組みにおいて認知症の人のケアが提供されてお

り、都市部では病院や施設ベースのケアが、農村部では地域や在宅ベースのケアが提供される傾向にあること等が紹介された。

今年度の後半は、「認知症の人と家族の会(ボケ老人を抱える家族の会)」の立ち上げに携わり、老年看護、認知症ケアの実践・教育・研究のパイオニアである中島紀恵子氏を講師に、認知症の人を主体をもった同じ地域の生活者として位置づける視点(生活モデル)、決め事は当事者が決めることを原則とすることを訴えて社会を動かす視点(社会モデル)から、認知症をめぐる社会の直面する課題やケアのあり方等を検討していく予定である。

研究会等日報

- 10月25日(金) 「透析導入の共同意思決定における患者の経験」研究会
- 11月 5日(火) 40年史編纂委員会開催
- 11月26日(火) 40年史編纂委員会開催
- 11月28日(木) 「過疎地と都市部における高齢者の心理・比較研究」研究会
- 12月13日(金) 「全体として人を見ること／診ること／看ること」研究会
- 12月13日(金) 編集委員会開催
- 12月17日(火) 40年史編纂委員会開催
- 1月 7日(火) 40年史編纂委員会開催
- 1月10日(金) みらいエンパワメントカフェ'24
「若者の居場所づくりとエンパワメント」
- 1月11日(土) 創立40周年記念シンポジウム
- 1月17日(金) 選考委員会開催
- 2月 6日(木) みらいエンパワメントカフェ'24
「豊かな人生に向けた自分エンパワメント」

